
お姫様のわんこ

鮎塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姫様のわんこ

【Nコード】

N1011E

【作者名】

鮎塩

【あらすじ】

安宿で目覚めた俺は、首に手をあてて固まる。な、なんで首輪が！？って、考えるまでもなく犯人はあいつしかない……。「ふっふっふ、これでユージンは私の犬だな！」見た目だけは可憐な少女に振り回される青年の物語です。

00・ 手を取り合って

頭上高くの天窓から降り注ぐ、青白い月光はひたすらに儚く、頼りなく。

それだけしか光源のないこの閉ざされた部屋では、物の輪郭がかすかにしか掴めない。

手を差し出したまま黙ってしまった少女の表情だってわからない。

泣きそうなのか、憤っているのか、微笑んでいるのか　　見えないけれど、一言では表せぬ複雑な表情をしているのだろう。

その手をとってしまったえば後戻りは出来ない。

でも。

だけ。

……………それでも、差し出された手のひらから目がはなせなくて。

彼女は、この私から見れば幼い少女は、とてもとても、悲しいくらいに優しいから。

悲しいほど強く、悲しいほど真っ直ぐに気持ちをぶつけてくれるから。

差し出された手を嬉しいと思ってしまったから。

彼女は何も言わない。

ただ待っている。

私の選択を、決意を、覚悟を、理解を、意思を。

試しているわけでもなく、拒絶をも恐れず、ただ優しい沈黙で待ってくれている。

彼女は賢い。

私を連れ出すことの意味を、分かっているはずがない。どれほど罪深いか知っていても、それでもその手を差し^{かぐし}のべてくれた。

嬉しいと思ってしまったから。

きつと答えは最初から出ていたのだ。

緊張にか、恐れにか、この身を浸す歓喜にか、意思ではどうにもならない身震いが襲い、私は自身に苦笑する。

暗闇の目隠しのおかげで、彼女には気づかれていないと思うけれど。ああ、でもせつかくの彼女の表情が見れないのは悔しいな。

はるか天空から見下ろす鷹のような、彼女の凄烈な意思がこめられた瞳が見れないのは残念だ。

私は余韻に震える手を、少女の小さなてのひらに重ねた。

「アンジェリカ

」

その思いに応えよう。

00・ 手を取り合って（後書き）

もう一個の連載とかいろいろ行き詰った時の息抜きに、コメディタ
ツチ（？）で始めてみました。

珍しく恋愛要素が少しあり。こっちは10話とかからない予定です。
最後までのおんびりとお付き合いいただければ幸いです。

01・ 命名ボチ？

突然だが、悪夢と聞くとどんな夢を思い浮かべるだろうか。

やっぱりこう『怪物に追いかけられているのになかなか前に進まない夢』とか、『試験当日なのに何にも勉強していない夢』とか、そんなものが一般的だろうか。

それらも確かに悪夢なのだろうが、俺的には幸せな夢こそ悪夢だと思うのだ。

夢は願望の表れだという。

その夢が幸せであればあるほど、覚めたときの空しさは形容しがた
いし、なにより自身の欲望を夢という形で目の前に突きつけられて
平静でいられようか。俺には無理だ。

という訳で朝っぱらから自己嫌悪まっしぐらという、嫌な図が出来
上がるのである。

「うーあ……」

許される夢を見た。

俺の精神の安定のために仔細は省くが、懺悔をする夢を見たのだ。
すべての罪を許される夢を。

あれが俺の望みかと、自分の精神を疑う。

なんて、醜悪な。

最悪の目覚めのまま上半身を起こす。

額を片手で覆ってうつむき、溜め息を一つ吐き出した俺は、”チャリッ”という耳慣れない金属音に動作を止めた。

そのまま数秒固まる俺。

おそろおそろ手を喉元へあてると、硬質な感触がはつきりと存在感を訴えていた。

く、首輪……？

お姫様のわんこ1

「アンジェリカアーーーーー!!!!」

近所迷惑をかえりみず力任せに戸をブチ開ける。安宿の扉はかなりお年寄りなのか、錆びた蝶番がギシリと抗議をしてくるが無視。

狭い部屋の中央、お世辞にも柔らかいとは言えない質素なベッドに、目的の人物はいた。

くっ、スピヨスピヨと幸せそうに寝てやがる…！

「……………アンジェリカ……………アンジェっ！」

ゆさゆさ。

しかしベットで眠るお姫さまは、俺の揺さぶる手をペシッと叩き落し、寝返りを打って背を向ける。

戸を開け放つ音にも反応しなかったんだから、この程度で起きないのは当然。

「アンジェ今すぐ起きろ説明しろこんなことするのはお前しかいないんだよっ！」

渾身のデコピンを無防備な額に　しよつとしたが近づけた手首をガッシと掴まれ、掛け布団の中に引きずり込まれる。

うっ、アンジェの顔が目の前に！

まだ肌寒さの続く早春なのも悪かった。あつたかい抱き枕発見とばかりにアンジェは全身で絡み付いてくる。
とりあえず彼女の怪力はしゃれにならん。普通に死ねる。

「ぬー」

「っただただ！こら、絞め落とす気か！」

「あつたかいー……………」

「いい加減に、起きろっ」

「むわっ！？」

唯一自由になる右手で、彼女の耳の裏側に触れる。数少ない弱点らしい。

「む……？ ……ああ、おはようユージン……」

「おはよう。首輪。説明。早く！」

と言いながら、自身の首を指差す。

俺が必死で単語でまくし立てる様は、悔しいことに余裕がないのが見て丸分かりだろう。

いや本当、朝起きたら金属製の黒い首輪がはめられてるとか、なんの冗談かと思っただぞ。

しかもどうやっても外れないそれは、もちろん俺の記憶にないものだ。

呪いでもかかってるんじゃないのかこれ。

アンジェは寝ぼけた目をこすりながら、俺の首筋に視線を定める。

「首輪だな」

「ああ、首輪だ。どっからどう見ても紛^{まご}うことなき首輪だ。どうせお前だろうがコレをやったのは」

「どうせとはひどいな、ユージン」

「……否定しないイコール肯定と取るぞ？」

もう目も完全に醒めただろうにアンジェは俺に抱きついたまま離れない。しょうがないので、そのままじっと見つめ合う。

しばらく俺の抱き枕状態が続く。

彼女も年頃だろうに一切色っぽい雰囲気がないのはなぜだろう、と俺の思考が脱線し始めたあたりで、アンジェは答えるようにニマリと笑った。

「うむ、予想通り似合っているぞ」

彼女の細くも剣をたしなむ無骨な指が、首輪の輪郭をつつとなぜ
る。

思わず愛ある頭突きをかましてしまった俺は悪くないと思います。

……ちつとも効かなかったけどな！

*

アンジェ曰く、夜中に俺の部屋に忍び込んで首輪をつけていつてく
れたそうで。

「……………なんでわざわざそんなことを……………」

「気づかぬユージンが悪い。それでは簡単に寝首を掻かれるぞ？」

ふふ、と意地悪く微笑みながらも、アンジェはちやくちやくと身支
度を整えている。……のだらう多分。

俺は彼女に背をむけベットに腰を下ろしふて腐れている。

彼女は無頓着というか開けっ広げというか、着替えを見られたとて
たいして気にもしないだろうが、まあそこは常識として。

「お前の気配なんて読める訳ないだろ。しかも何で外れないんだよ

これ。色々試したけどビクともしやしない」

「ふむ、それはそうだろう。というかそうでないと意味がない。せっかく苦勞してもぎとった報酬だぞ」

「報酬？ …………… あ」

首輪に力り、と爪をたてる。そういや、この前受けた依頼は何かおかしくなかったか。

「神世代遺跡の調査…………… なんてあんな低報酬で受けたのかと思ってたら、まさか」

「ん、察しがいいな、そのまさかだ。別途で遺跡から一つ好きなものを持っていいと裏取引をだな」

「ってことは、この首輪は……………」

「太古の呪術のかたまりだな」

「……………」

それって外すにはどれぐらいの奇跡が必要なんでしょうか。

世界各地に散在するその遺跡群は、古代に存在した天使が造ったとかされているが本当かどうかは判明していない、そんな謎だらけの遺物である。

なにかと危険の多いその調査随行を、アンジェリカが勝手に引き受けてきたのだが…。

「とりあえずその首輪、従来の貴金属なんぞ比べ物にならん硬度で切断は不可能だな。あらゆる魔力干渉も打ち消すから、魔術での破壊も無理だろう」

「……………。アンジェ、それだけじゃないんだろ？」

「首輪の機能のことか」

「そう」

「ゾウが踏んでも壊れないという素晴らしい機能だと思わんか」
「だから。ぜったいそれだけじゃないだろ？」

アンジェの突拍子もない行動にはよく振り回されているが、基本的に意味のないことはしない主義だ。
慌てふためく俺を見たいがためだけに、こんなことをするとは思いがたい。（や、ありえなくもないが）

「それはだな、ユージン。はめた者が念じたたん、はめられた者は息が出来なくなるといふ、不思議な首輪なのだ」

「……………アーンジーサーン……………」

「ふっふっふっ。私の命に逆らうと苦しくなると言う寸法だ。これで、ユージンは私の犬ぼちだな！」

俺が呆れた目で振り返れば、アンジェは満足そうに頷きながら、蜂蜜のような甘い色合いの髪を結い上げているところだった。

窓から差し込むさわやかな朝日が、彼女をまるで天使のように神秘的に見せる。

ハニーブロンドの髪に、アメジストの瞳。見慣れているはずなのに感動を覚えるアンジェの容姿に、不覚にも一瞬見とれる。

見た目だけなら愛らしいのだが、このちっさい少女は。

「よし、着替え終わった」

アンジェは鏡の前でくるりと回り、最終チェックを済ましたようだった。

彼女の普段着は、可愛らしさを損なわない程度に動きやすさを重視して作られた品だ。

深緑を基調に金系の縁取りが施され、騎士服とドレスを足して割ったようなその服は、彼女の凛々しい雰囲気をよく引き立てていた。

ちなみに俺は上から下まで真っ黒で、特徴と言えば額の斜め傷ぐら
いだ。ただ肌だけは我ながらどうかと思うくらい生っ白い。

「さて、出かけるぞポチ！」

「ああもう…………そのへんの追求は置いておいて。アンジエ、ちょ
つとこつちおいで」

「うむっ、なんだ？」

チョップ。しかし片手で防がれた。

「…………ふふふ、ご主人様に対して随分だな、ポチ…………」

「…………ははは、じゃれ付いたぐらいで怒ると器が知れるぞご主人
様…………？」

ギリギリギリ。

俺たちの『鏢^{つば}ぜり合い』ならぬ『手ぜり合い』にアンジエは余裕の
顔だ。

ああ…………これぞ現実に横たわる悲しくも厚い壁。俺よりもアンジエ
の身体能力の方がはるかに高いのだ。

総合的に負けているつもりはないが、徒手空拳では勝てる気がしな
い。俺も鍛えてはいるが、はっきり言ってアンジエとは紙と岩ぐら
いの差が…………やめよう、むなしい。

「っていうかポチって何だ！」

「嫌ならクロでもいいのだぞ？」

「はははははは」

「ふふふふふふ」

しばし不穩に笑いあつたあと、アンジエは真剣に言い放った。

「まあ、落ち着け。私とて無意味にからかったりはしない」

「からかったたのも本音なんだな？」

「慌てっぷりも可愛かつ……面白かったが、本題を通すにはこうしたほうが早いかなと思ってな」

「え？最初なんていった？」

「……で、本題だが！」

アンジエはごほんとワザとらしく話を遮り、意味ありげに腕を組んで窓の外を眺めた。

「先日受けた依頼でな、ちょっとお前が嫌がりそうな内容だったから、ついな」

「って、また勝手に受けてきたのか！」

「ああ、潜入任務なんだが……」

アンジエは少しもつたいつけて、窓に顔を向けたままチラと俺に視線だけよこす。

「必要粹が女二人なのだ」

「開き直るなっ……、って……え」

まさか俺が嫌がりそうな仕事って……。

「アンジエ……まさか俺に女装しろと……？」

「もう受けてあるから、キャンセル不可だがな」

ていつかなんで受けたんだ、そんな依頼……！！

アンジェが『とある屋敷に潜入するんだ』とか、『メイドの空きを二人分とるのがやっとならしい』とか、『任せろ、きっと死ぬほど似合う』とか言っているが、耳を右から左へ抜けて頭に残ってくれない。

頭には、拒否する「窒息という理不尽な等式だけがグルグルと回っている。

俺は真っ白に燃え尽きて、ベットに仰向けに倒れこんだ。

02・無茶です、ご主人様。

円形に開けた広場には朝も早いというのに人で溢れかえっている。

屋台の屋根から飛び立つ小鳥の羽ばたき、おばちゃんの大きな客寄せの声、胃を活発化させる串焼きのいい匂い。

ここでは世界でも有名な、大規模の『朝市』が開かれている。

うつ……予想以上の何という人ごみ。

「ユージン！何をしている、早く行くぞっ」

アンジュは食欲に眼を輝かせて、動こうとしない俺を引っばる。

「なあアンジェ……別の、もっと人の少ないところで食わないかい？」

「何を言っている、これを目当てにシルヴァニアに来たようなものだぞ？ 第一腹が限界だ。今さら場所を変えるなどありえぬ！」

「……もっと高い宿にすればよかったよ」

あの扉一つでそれと分かる安宿に、まさか朝食がついてくる訳もない。

とにかく何か食べようと、こうして街にくり出したのだが……ここまで人が多いとは。

いつもなら祭りみたいな雰囲気すら楽しいと思えるのだろうか。

「何、大丈夫だユージン。万象の精霊に誓ってもバレはせん」

アンジエは俺の手を引きながら振り返る。

「うむ！ とつても美人だぞっ！」

「……………傷口をえぐるなあああ！！！」

スカートって歩きにくいんですね…………。

お姫様のわんこ2

「さて、出かけるぞユージン。これに着替える」

「いやアンジエ、考え直せ。冷静に考えて成人男性に女装なんて無理だろ！」

アンジエが渡してきたナニカは、どう見ても綺麗な女物の服だった。

しかも背の低いアンジェが持っているはずがない丈の。

「大丈夫、サイズはピッタリのはずだ」

「俺の話聞いてた！？ い、いや、いつ測った、とかも気になるけどまあいい。それより依頼は午後からだよね？」

「うむ」

胸を張って頷くアンジュ。

「ならなんで、今から女物を着なきゃならんのだっ」

「やるからには早く慣れておいたほうがいいだろう？ お前もバレないかどうか、他人の眼で確かめて置きたいだろうし」

「慣れ……って……、……慣れたくない……」

でも確かに、本番のメイド服（きつとフリフリひらひら確實）などもっとひどいのだ。これで音をあげていたら、依頼など到底こなせないだろう。

「……むう、そんなに嫌か？ なら条件を出そう」

「……条件？」

よっぽど俺の顔が悲壮に見えたのか、珍しくアンジェが譲歩に出る。

「午前中に誰かが一度でも女装と見破ったら、この話はなかったことにしよう。違約金は惜しいが」

「む……」

「どうだユージン？」

「……それでも嫌だっつつたら？」

「お前の主人は誰だ？」（意訳：首輪がうなるぞ）

「……はあ。わかった、一応着るが、期待にそえないこと確實だ」

ぞ」

「ふふ、それはない」

アンジェはよほど自信があるのか、余裕綽々の顔で首肯してみせた。
……………よし、それなら眼に“毒”見せてやる！

……………。

スレンダーな美女がこっちを呆然と見ている。

誰あろう……………俺だ。

地毛と同色のかつらを被り、紺色のワンピースドレスに黒タイツを
あわせ、ふわふわの黒いカーディガンで肩や手をごまかし、そして
軽めの化粧を施す。

それだけのはずなのに……………アンジェの言うとおり、鏡に映った姿
は女性にしか見えない。

思わず鏡を磨いてその鏡像が本物が確認してしまったほどだった。

確かに美形だと言われたりはするが、それと女装が似合うのとは別
問題のはずなのに。

しかも俺の背は平均ぐらいあるというのに、だ！

「おお、すごいなユージン！腰を絞らなくても充分細いぞ」

「そんな感想はいらない」

「しかし白いな。……ふむ、化粧はほどほどの方が惹き立つな」

「そんな解説はいらない！」

俺を着付けるアンジエは生き生きとしていた。水を得た魚……訂正、水を得たサメのようだった。

「うむうむ。ちょうど首輪で喉仏が隠れるな。あとは声だが、ほれ」

「……なんだこれ」

「変声器。前の前の、さらに前の遺跡でかつぱらってきたものだ。

逃亡時に役立つと思って持ってきたのだが、思わぬところで目の目を見たな」

「……………」

「魔術で変えてもいいが、それだと感知されれば一発でバレるからな。せつかく完璧なんだ、止めておこう」

「……………」

と、そんなやり取りがあって、今に至る。

俺たちは波を漂うくらげのように、適当に流されながら屋台を物色していく。

「ユージン、肉だ肉。肉を食おう。この地方はラム肉が最高だそう

だぞ」

「はいはい、はしゃぎ過ぎて逸^{はく}れないように。しかしお前、よく朝からズツシリしたものを食えるな……」

「私の胃をなめるなよ。ユージンこそ、朝飯はちゃんとらぬといつか倒れるぞ。コーヒー一杯だけなど朝食を愚弄しているのか？」

「お前こそコーヒーをなめるな。アレがないと朝は頭がすつきりしない……っと、すみません」

通行人の足を踏んづけてしまい反射的にあやまる。普段ならしないような些細なミス。

相手は気を悪くした風もなく……むしろ気色悪いほど機嫌よく、いいえと言いながらすれ違っ^ていった。

それは男二人組みで、去っていった方向から彼らの会話が漏れ聞こえる。

「うむ、私たち二人ともかわいくてらつきー、だそうだ」

「知らん。気のせいだ。俺は何も聴こえなかった！」

「うむ、鳥肌すごいなユージン」

女装だとバレれば恥だし、バレなくても男として恥だ。

どっちにしろ恥ならとつととバレて欲しいと、口調すら変えていないのだが気づかれる気配もない。

よく考えれば、普段アンジェの方がよっぽど男前な話し方なのだから、口調^{これ}ぐらいでは違和感にさえ成らないのかもしれない。

「まあ、接触を機会に声をかけてくるような連中ではなくてよかったな」

「……想像したくもない」

「さて、ユージンの希望が潰えたところであの店に寄るぞ。スープ

が美味そうだ」

「まだ潰えてない！」

「おっ、見る看板猫だ。スープついでに触りにいくぞ」

「こらっ、触るなら食事のあと！毛が飯に入るでしょ！」

それから、自由奔放少女を窘めたり、男どもの生暖かい視線を必死で見ない振りをしたり。

街の中央にそびえる精霊教会が正午の鐘を告げても、最後まで見破られることはなかったとだけ言っておく。

ちなみにアンジェは勝ち誇ったような顔で誉めてくれた。……そこは頼むから慰めてくれ。

*

この世界に神はいない。

今は伝説や遺跡にだけかすかに残る、かつて天使と人間が共に暮らしていた時代の痕跡。

その頃には確かに創生神が存在していたそうだ。

しかし唯一の神は一人の堕天使と相打ちとなってしまふ。

堕天使は神の最後の力で監獄世界へと落とされ、ついには神自身も力尽きて消滅した。

やがて天使たちが一人二人とこの世界を去り、あるいは自ら命を絶ち姿を消していく中、大変だったのはむしろ人間たちだった。

世界の安定を保っていた天使がいなくなって、一部の地域は砂漠化し、あるいは零下に投げ出され、自然災害が発生し、病疫が襲い掛かってきたのだ。

しかし見捨てられたこの世界にも、人と生きようとする天使たちがいた。

それらは極少数ではあったが、人を導き、時には人と交わり子を成して、少しずつ人の生活を改善していった。

以前ほどの豊かさではなくても、たとえ貧富の差や地域の格差は変わらなくとも、それでも人々は天使たちに感謝を捧げた。

やがて少数の天使らは人の血に埋もれて消え、全ては記憶の果てへと薄れていく。

そして人間の信仰は自然そのものへと移り変わっていき

『神世代』と呼ばれる時代は終わりを告げたのだ。

……と、ここまでが、現在もっとも有力とされている説である。

要は現代で盛んな宗教は、自然崇拜であるということだ。

「にしても、精霊教会の依頼は何度目なんだかな」

「すっかりお得意様になったな。…………仕方ない事とはいえ、っと。
着いたな、ここだユージン」

「…………ああ」

御者に料金を握らせ、黒塗りの馬車を降りる。

そろそろ太陽が月と交代するという頃、俺たちは目的の屋敷に到着した。

自然崇拜、その信仰の集約が『精霊教会』。

永年第一位を誇る、最大規模の世界宗教である。

その信仰とは、自然界のあらゆる存在には靈魂 精霊が宿り、あらゆる現象は精霊かれらの意思によるというもの。

簡単に言えば、『嵐に宿るあらゆる魂よ静まりください』、もしくは『豊かな土壌のお陰で今日も食事にありつけます、水や大地の精霊さんありがとう』などといったような。

そして『精霊教会』を語るにおいて、『神世代遺跡』は欠かせないものの一つである。

精霊教会は各地に支部を持ち、その情報網と人材を駆使して『遺跡』の管理をしているのだ。

すべての国は所持する遺跡を教会に登録する義務を負い、どれほどの大国であれ遺跡の隠匿は破門を食らうほどの重罪とされている。

という訳で、そんな教会からの依頼とは。

「『未登録遺跡』所持の摘発、か。端っことはいえこんな市街地にあるもんかね」

「それを調べるのが私たちの仕事だろう」

「まあそうんだけどな……、むしろこんな事^{じょう}してまで無かつたら俺は泣く」

古都シルヴァニアのはずれ。

俺たちは大きな屋敷　小さな湖なら丸ごと収まりそうなほどの鉄^{てつ}拵^{じゅう}えの門と対面している。

決して成金趣味なものではなく、観光名所にもできるほど調和のとれた建物なのだが、どうしてか長居できない空気を漂わせている。

お前らは誰だと冷たい眼で見られている心地だ。

「さて、いよいよ持って逃げられんぞ、（メイド服の）覚悟はいいか？」

「一思いにやってくれ」

もう朝の実践で、吹っ切れてはいけないものまで吹っ切れた。恐れるものなど何も無い。

さすがに色仕掛けをして来いとまで言われれば逃げるが。

わかったとアンジェは頷いて、門に備え付けてある鈴紐を引き鳴らす。

それは涼やかな音をたて、客の来訪を邸内へ伝えた。

02・無茶です、ご主人様。（後書き）

やりたい放題です。……………多分次もやりたい放題です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011e/>

お姫様のわんこ

2010年10月9日06時27分発行